

Fate/Fake Saber

L!neA

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もし謎のヒロインXがセイバーと名乗って聖杯戦争に参加したら、というお話。

目次

プロローグ

1

1話

6

プロローグ

「サーヴァント。セイバー。召喚に応じ参上しました」

まばゆい光の中から青いジャージを着た少女が突然現れた。

「マスター、よろしくお願ひします」

そう言うのと彼女はこちらをじつと見つめた。

「えつなになになになにこわいこわいこわいこわいこわいこわい」

俺はあまりの出来事にパニックになり頭が真っ白になった。

「落ち着いてくださいマスター。私は怪しいものではありません」

「ああああああこっちきたあああああああつつつつ」

近づいてきた彼女に恐怖を抱き俺は座ったまま後ろへ逃げた。

「ですから怪しいものは……」

彼女は俺に手を伸ばしてくる。

「つつつつ……!!」

ついには恐怖のあまり声が出なくなり、そのまま気絶してしまった。

「大丈夫かなこの人。」
マスター

~~~~~

「あの一……大丈夫ですか？」

目を覚ましたらさっきの少女がいた。

「……近い」

あまりの近さにとっさに言葉が出てしまった。

「怪我とかありませんか。もし怪我したなら私が薬を塗ってあげますけど」

そう言っただけから彼女は謎の水色の液体が入った瓶を取り出した。

「知らないしこわい」

見知らぬ少女からそんなやばい色の薬をもらうとか正気の沙汰じゃない。そもそも  
気絶してただけから怪我なんかするわけがない。そう考えているとだんだんと頭が落  
ち着いてきたので

「ところで君は誰なんだ」

と質問した。

「私はセイバーです。ある目的のために召喚されました」

「ある目的ってなに？」

「聖杯戦争に勝ち進むためです」

「聖杯戦争・・・？」

初めて聞いた言葉に俺は理解ができなかった。その様子を見て彼女は話を続けた。

「あなたには聖杯戦争に参加するマスターとして私と一緒に戦ってもらいます」

「戦うの？誰と？」

「私以外のマスターとサーヴァント、そしてセイバーです」

「またも聞きなれない言葉が出てきた。そういえば俺のこともマスターって呼んでいいかな。」

「マスターはなんとなくわかるんだがサーヴァントって何だ？」

「サーヴァントとは私のように過去の英雄があーだこーだでこの世にやってきたものです」

「いやちよつと待て。あーだこーだって何だ、あーだこーだって。」

「いやよくわからんもう少しわかりやすく説明してくれ」

「仕方ないですね。過去の英雄が魔術の力を使ってこの世に現れるいわば兵器のようなものです」

「・・・ということは君はサーヴァントと言っていたし兵器ってことか？」

「はい。セイバーですし最強です」

少女はまっすぐ自分を見つめた。まるで私を信じろと言わんばかりに。

「わかったよ。信じればいいんだろ」

そう言うと彼女は軽く微笑んだ。

「聖杯戦争に詳しいルールとかってあるのか?」

「ありますとも。さてなにか話しましょう・・・

~~~~~

彼女は嫌な顔することなく、俺に聖杯戦争について詳しく教えてくれた。

聖杯とは何かを。

英霊とは何かを。

宝具とは何かを。

そして、俺のマスターとしてのあり方を。

「最後に一つ質問いいか?」

「いいですよ、マスター」

「いや、君の名前というか、なんて呼べばいいのかなって。ずっと君って呼ぶのも何かと

不便だと思っし」

「でしたら私のことはXと呼んえつくすでください」

「X？それが君の本名なのか？」

「いえ、これは私のコードネームの略称です」

「ああなるほど。それなら納得した」

「そうしたら私としてもマスターの名前を知っておきたいのですが」

「そっかまだ言っなてなかつたな」

「俺の名前はツクバヒロ。ヒロとでも呼んでくれ」

1話

外を見ると夕焼けが広がっていた。

「そろそろ夕食の材料買ってこないといけないんだけど、何か食べたいものあるか？」
と聞いた。すると今までとは打って変わって

「ハンバーグが食べたいです！」

とテンション高く返事した。

「お、おう」

と俺は気圧された返事をした。

~~~~~

「財布よし。スマホよし。鍵よし。マイバッグよし」

と一通り確認して、立ち上がったとき

「私を置いていくつもりですか？」

と後ろからXの声がした。

「ついてこないダメなのか？」

「当然です。マスターがいつ命を狙われるかわかりませんし」

確かにXの言っていることはごもつともだ。だが普段一人で遊んだり買い物したり、集団で行動するにしても男友達とカラオケいくくらいしか俺がいきなり金髪の少女と仲良く歩いてたら注目を浴びてしまう。もし友達に見つかりでもしたら一気に広まって学校で囃されるに決まってる。それは非常に避けたい。

「Xの言ってることはわかるんだが・・・な？いろいろ周りから変な目で見られそうだから」

「それならご安心を。消せますので」

というとともにXの体はスウウと消えた。

「まあそれならいいか・・・」

独り言話す変なやつと思われるけどしょうがない。

「あんまり外で大事起こすなよ？」

ウン、とXは軽い笑顔で頷いた。

~~~~~

スーパーまでは結構近い。信号は1回しか渡らないし、走れば2分で行く。

「この距離ならついてこなくてもいいんじゃないか？」

「何をいいいますか！ マスターとサーヴァントは常に一緒に行動するべきです！」

「はいはい。わかったわかった。でもプライベートは確保させてくれよ？」

「私は別に構いませんが？」

「俺が困るんだよ……」

大きくため息をついたところでスーパーの看板が見えてきた。

「スーパーつくけど、ハンバーグだけでいいんだな？」

「ええ、お願いします」

「ほんとだな……？」

ウイイイインと自動ドアが開く。中はクーラーがガンガンに効いてて少し寒い。

「おおーっ！ これがスーパーマーケットってやつですか！」

「ああ、まあここは地域でもでかい方だけだな」

「パンが山積みになってます！ 美味しそうです！」

「ハンバーグと一緒にパンもよさそうだな。ちよつと買っていくか」

「私メロンパン食べたいです！ すぐくそそられます！」

「いや、ハンバーグと一緒にメロンパンはダメだろ……。あ、店員さんバケット一つく

ださい」

「マスター！カレーパンも美味しそうです！」

「いやもうパンは買ったから……。ほら早く行くぞ」

「えーもう少し見ておきたかったのですが……。仕方ないですね……」

「なんでこんなにテンション高いんだよ……」

それからはもうひどかった。

人がメニューを考えているそばで「ピザ美味しそうです！」だの「お好み焼き美味しそうです！」だの言ってくるから集中できない。

スーパを一周することにはもう疲れが半端なく、会計を済ませて家路につくころにはマイバッグが普段より重く感じ、とにかくしんどかった。

~~~~~

帰宅した俺は疲れながらもXが希望したハンバーグを完成させた。

ついでにスープも作った。

「ほら、できたぞ」

Xは目を輝かせながら

「おおーっ！すごく美味しそうです！いただきます！」

と言い、ハンバーグを口に入れた。

「んんん！！美味しいです！マスターは料理が上手ですね！」

「まあ世の中便利になったからね・・・」

Xの食事をしている様を見てると、そういえば久しぶりに人と食事をしてるなと思つた。兄弟はいないし、父は単身赴任、母は実家に帰省しているからここ最近ずっと1人で家にいた。自分のために作るのも時間の無駄だなと思つて外食も多かつたし、Xのためにご飯作るならやりがいがありそうだなとも思つた。

「また何か食べたいものがあつたら言つてな。作れそうなもんは作るから」

「ほんとですか！それならまたお願いします！・・・まあ」

突然Xはテンションが低くなつた。

「・・・まあ？」

「言つてませんでしたっけ、サーヴァントって食事いららないんですよ」

・・・は？